『日本言語地図』をめぐって

——本誌70集藤原博士の書評を読む——

徳川宗賢

本誌70集に藤原与一・書評「言語地図集の理想を目ざして（国立国語研究所『日本言語地図　第1集』に思う）」が載った。それに関連して、日本言語地図編集の立場にあるものとして、言語地理学・言語地図一般に思いをいたしつつ、感想を述べてみたい。

資料について

われわれは、言語地図とは、元来、資料と作図者との徹底的な対話によって画かれるものである、と思っている。したがって、資料に欠陥があったり、作図者側の力量に欠ける点があれば、スタートから問題がある、ということになる。

この点から、藤原書評㈠で、原資料の持つ意味を重視し、日本言語地図作成のための調査で、多くの調査者が分担して実地調査にあたった点、および調査期間が十年にわたった点に疑問を示されたことは、いちおう納得できる。「理想を目ざ」（以下引用は「　」で示す）す立場からは、資料を得る状況が、調査者・調査期間に関することを含めて、相互に差の少ないものであることが望ましかろう。

しかし、「書評」を読んだ人の中に、国立国語研究所が、資料をたがいに比較しうるものとするための努力・配慮を、全面的に怠ったように感じた人がもしいたとすれば、これは問題である。「研究所の採った調査手段は、私には考えられない冒険であった」とあるが、一方、書評の行文は、「調査簿の内容・形式などのことにはおよ」（圏点筆者、以下同じ）んでいない。

よき資料を得るための工夫は、調査者や調査期間に関することばかりでなく、調査簿の内容・形式など、その他すべてに満遍なく及ぶべきである、と思う。

われわれがどのような点を考慮し、どのような手続きによって調査にあたったかについては、第1集別冊付載の「日本言語地図解説——方法——」を読んでいただければ幸である。

簡単に言えば、われわれは全国一率の質問文——絵も——（刺戟）を用意して回答（反應）を求めた。それ以外については、多くを求めていない。したがって別の刺戟に対しては、あるいは異った反應が得られたかも知れない。われわれは、むしろこの別の刺戟に対して現われたかもしれないさまざまな反應について、資料の不足している点に不満を持っていた。そんなことから、ここで調査者や調査期間の問題だけを、調査法全般の中における位置づけなしに特にとりあげられることには、いささか当惑する。

書評㈠の行文に関してもうひとつ気になったことは、「資料の均質性」ということばである。書評には「言語地図製作上、基本的に重視しなくてはならないのは、とりあげる資料の、徹底的な均質性である」とある。

まことに当然のように思われ、筆者もかつて同様の発言をしたことがあるが、いまでは問題がありそうな気がしている。まず、A地点のよき被調査者（たとえば65歳の農婦）のよき回答と、B地点のよき被調査者（同じく65歳の農婦）のよき回答とを、はたして「均

質」ということばでくくっていいか、という問題がある。次に、「均質」ということばを使うにしても、現実の調査結果というものは、理想の「均質」に対して、どの面で、どの程度「混質化」しているものか、という問題もある。

前者については、いまはっきりした意見を述べることはできないが、「均質」ということばは不適切ではないか、またこれは言語地理学の根底に触れる問題なので、十分な用意なしに論ずべきでない、とだけは言えるような気がする。

後者についても、現在のところわれわれは、確実な資料をもととしての意見を述べにくい。ただ、いちがいに「混質化」を云々するより、せめて音声表記の面での混質化、標準語・別地域の言語あるいは別位相の言語の混入による混質化、類義表現の混入による混質化ぐらいはわけておく方がいいのではないかと考える。そして、調査法の各要目に対応して、たとえば調査者が多人数であることによってひきおこされるであろう混質化は、いったいどの部分に、どの程度まで及ぶものかを考えてみる必要があるのではなかろうか、と思う。単に「混質化」を恐れるより、「混質化」の正体を分析的に明らかにすることの方が、建設の道につながるのではなかろうか。

なお、この種の問題をさらに深く考えるために、われわれは特別の調査（「検証調査」と呼んでいる）を、昭和四十年以来、別途に行ないつつあることを付記する。

忠実さと効果

書評㈡・㈢については、特に述べることはない。作図者が「資料の実質に忠実でなくてはならない」ということと、「見るによい図、見てすぐわかる図、直覚的効果の大きい図、これが言語地図の第一条件である」という二つの命題は、誰しも異論のないところであろう。現実の場で両方のすじを通すために苦心するのが地図作成者というものではなかろうか。

もっともこれは、「言語地図」作成に限ったことではない。言うまでもないが、表やグラフについても同様である。さらには、論文・著書についても同様なことが言えると思う。

書評はまた、完成された地図は、資料の実質を忠実に反映しているかどうかについての批判を鈍らせる「魔力」を持って読者に迫る、という。そういうこともあろうが、われわれをおびやかす「魔力」は、実は、どこにでもあるのではなかろうか。「言語地図」に限った問題ではなさそうに思われる。

白地図について

書評㈣の白地図に関する部分には、われわれの理解を超えるところがいくつかあった。たとえば「このままだと、全国をまんべんなく調べたようでもある。が、じっさいには、山地帯など、どうであったろう」などとある。

日本言語地図では、白地図の調査地点の位置に調査結果が記入されている。したがって、飛騨山脈にあたる地域を例にとれば、そこは空白になっている。印刷技術上多少符号がずれていたとしても、以上の発言の真意はくみとりにくかった。

「もっと大きい図を作って、調査状況の全体を正確に反映せしめるべき」だとある。しかし単に地図の縮尺を変えても、かりに符号がそれと比例して大きいならば、現在の地図を虫眼鏡で拡大したのと

同じことになりはしないか。真意は「図が小さすぎる」のではなく、符号が図に対して大きすぎるということなのであろうか。

地図の大きさは、元来、人間の肉体的な大きさとの関係によって決められるべきものと思われる。図が大きくなれば、かえって「全体を」見渡しにくくなるかもしれない。地図の縮尺と「まんべんなく調べたよう」に見えることとは、本来関係がない。調査地点の密度は、調査地域の面積と調査地点数とによって一義的に決まるのではなかろうか。すくなくとも、われわれが読者を眩惑する意図をまったく持っていなかったことだけは、断言できる。

地勢の表示

地図作成の目標は、調査地域全域の言語分布を、調査地域の自然・人文的環境と照応させつつ、ほどよく表現するところにあると考えられる。

各地図にどの程度まで地勢を反映させるべきかは、調査地域の広さ、地図の縮尺、調査地点の密度、方言語形の分布様相、地勢以外にどんなものを表示すべきかなどによって決まるのであろう。「各図ごとに薄葉の地勢図が重ねあわされている」ことが理想のように提案されても、問題はそう簡単ではなさそうに思える。日本言語地図の現状（第2集の巻頭に概略的な地勢図を掲げた。第3集には人口図がつく。以下各集にいろいろな参考地図が各一枚ずつ載せられる計画である）が最上の方策とまでは言わないが、一方、書評の提案がそのまま最上のものとは考えられない。

調査地点の示し方（付・番号のシステム）

調査地点の示し方については、評者と編集者側との間に、見解の相違があるらしい。書評には、日本言語地図では調査地点が明示されていないようにあるが、われわれは、各地図にほどこされているマス目と、第1集巻頭の調査地点番号地図と、第1集別冊「――方法――」のうち、調査地点一覧および調査項目の履歴の部分とによって、明示されているものと考えている。一般に、測定結果をいちいち数字によって示すことと、ある座標軸を使ってグラフ式に示すこととは、等しい内容を持つ。これと同様に、マス目によって調査地点がわかるならば、いちいち地図上に具体的に書かなくてもいい、と原則的に考えているが、どうであろうか。

地点番号のシステムについても、見解の相違があるらしい。われわれには、日本言語地図で使用している〈方言調査基礎図〉の地点番号のシステムこそが、評者のことばを借りるならば「つねにどの図にも、すぐに利用しうる地点番号」のシステムなのではないかと考える。言語地図作成者（団体）ごとに別々の任意のシステムを使うことは、地名の変更の多い当節、将来に期待される多くのこの種の研究のために、障害にこそなれ利便をもたらすとは考えられない。国歌大観番号の効用を感ずるものとして、そう思う。

われわれは、依然として、この〈方言調査基礎図〉の地点番号のシステムが、広くこの種の分布調査に適用され、高次の総合にむかう礎石となることを、強く希望している。

資料の分類について

書評㈣で、作図過程の調査結果の分類・整理こそが「肝心な」作業であるとするのは、まことに同感である。「整理法を、一般的法則

に仕立てることができ」るかどうかはわからないが、「事情のゆるすかぎり、高い知見によるべきものである」ことは当然であろう。われわれの力不足を歎くばかりであるが、評者の挙げる具体例を見ると問題がないではない。

第1図に〔g〕の変種として別に〔ɣ〕を見出しに立てた件については、われわれが、多くの方々の協力によって集めた原資料を、できるだけ忠実に示す任務を持っている点を考慮していただければ、と思う。また、もし〔ɣ〕を〔g〕に摂してしまえば、たとえば房総半島における〔k〕の脱落現象と、この〔g〕の摩擦音化の現象との関連を考えるきっかけを失なわせてしまう、などということもある。

「このような音を聞きわけたかたが、もしも他地域にも臨んだとしたら、他地域についても、〔ɣ〕を報告されるのではなかろうか」という推理は、まことに正当である。しかし、そういう疑問が誰にも起こるとするならば、地図で〔g〕とあるものの中には、〔ɣ〕が含まれているかもしれない（多分そうであろう）として、読者は地図を見てくだされればいいわけである。何かの拍子で疑問が起こらなかったとしても、付録の別冊「日本言語地図解説――各図の説明1――」（一ページ）には、そのことが記されている。

次に引用される評者の苦心談は、同業者として理解できるところであるが、文末のことば「ワイ」「ワェイ」「ウェイ」の処理についての具体例には、わからないながら疑問が浮かぶ。ここには、音と表記との関係がはっきりしないために起こる問題が含まれていはしないか。ある調査者の記録した「ワェイ」とは、実際にはどんな音なのか。別の調査者の記録した「ウェイ」と違うのかどうか。違うとすればどう違うのか。それらがはっきりしないために「処理にこまる」のではなかろうか。すくなくとも、われわれの〔g〕と〔ɣ〕の場合にはそうした問題はない、といっていい、と思う。

意味分野の限定

「第一集に、発音の図と形容詞の図とをまとめたのは、巧妙であった。発音の図は他に優先する。ついで、方言現象として興味ぶかい、形容詞の領野をとりあげたのである。（人はたいてい、この種の領野に、さっそくの方言興味をおぼえる。）」に続いて、第34図きなくさいの問題にはいる。人は、形容詞の分野にさっそくの興味を覚えるものかどうか、そんなことも考えるが、ともあれ、次の第34図の問題は、どうも評者とわれわれとの間に介在する言語感覚の違いに原因があるらしい。

われわれは「布切れなど」と「衣類」と「薪類」とをならべた時、前二者に共通点を認め、最後のものを異質と感じるのだが、どうであろうか。書評の言うように「布切れなど」の中に「衣類」と「薪類」とが含まれるとするのは、どうも理解できない。岩手県下閉伊郡内の評者手持ちの一例を引用されても、それがどうして「質問文を、〝布切れなど〟としたのがわるかったのかもしれない」となるのかわからない。評者に感違いがあるのであろうか。

われわれは、〈布切れなどが火の中にはいったときの妙なにおいを、どんなにおいがすると言うか〉を求めたので、「薪類の燃えないでいぶっているにおい」を尋ねたのではなかった。いま、布切れなどと大ざっぱに言うより、木綿・毛織り・化繊ぐらいは区別しておいた方がよかったかもしれない、薪類のことも別に設問した方がよかったかもしれない、とは考えるが、「布切れなど」（糸くずなど

も含まれよう）を「衣類」に替えれば一切が解決するとは、どうも考えられない。

これは資料の分類のところに出てくる話だから「語義をじゅうぶんにおさえて語詞を分類す」べきだという発想からの発言なのであろう。われわれとても、完全ではなかったにせよ、最初から意味分野を限定して調査を続けた。一貫してどんな質問文（および絵）を使い、どんな点に配慮しつつ回答を求めたかは、第1集別冊「――方法――」に、質問文（および絵）だけなら各地図にも示してある。

よけいなことかもしれないが、こういうきめのこまかい話を伺うと、評者などは、たとえば「ワイ」などの文末のことばを、比較できる資料としてどのように求め、整理されるのか、気にならないでもない。

符号の選び方

地図作成者が、作図手続きのうち、分類された資料をいかに地図上に表現するか、どんな符号を使ったらいいかに苦心する問題は、一般の言語学者・国語学者から見れば理解しにくいことかもしれない。しかし、対象によって思考やその表現の形式が規定される面があるとすれば、言語地理学が方言の分布様相を対象とする以上、符号の選択は大切な問題になってくる。

符号の選択結果は、結局、作図者の対象把握の水準に対応する。文法学者が、文法観の視覚化に工夫をこらすことと、あるいは比較できるかもしれない。この点から、書評(ハ)で「図の生命は、符号にある」とするのは、同感である。

しかし、評者の具体的に提案する「配符法」「配色」法について は、納得できない点がある。

たとえば、(ハ)には「配符の地方的基準というものを考えてみたいのである。たとえば、中国地方方面に多く見えがちの分布事象には、○系統の符号を当てる。四国地方方面に多く見えがちの分布事象には、□系統の諸符号を当てる。近畿方面のものには△系符号を、九州方面のものには◇系符号を当てる。この基準ですでに若干の処理をしてみた。分布図上、符号の図形で、もう、どの地方にありがちな分布と、ことがきまっているのは、よいことではないか」とある。(ヒ)にも「いつ見ても、うすぐらい所で見ても、不用意に見ても、Aの色は要するに東国色とでもきまっていると、読者は何かと判断しやすくて好都合である」とある。

もし、中国地方方面に多く見えがちな表現を現実にとり出すことができれば、それに○系統の符号を与えることだけは、各図を通じてたしかに可能であろう。しかし同時に、四国（方面のもの）を□（系符号）に、近畿を△に、九州を◇にすることは、原理的に不可能ではなかろうか。

単語の分布の様相は各図さまざまであり、中国地方方面に多く見えがちなものがある一方、中国から九州にかけて多く見えがちな語があったり、さらに別に、中国地方とともに近畿地方方面にも多く見えがちなものがあったりする。このような状態であるゆえに、たとえ数枚の都合のいい地図にはこの原則が適用できても、言語地図集のすみずみにまでこの方式を適用することは、到底できない。

この提案が問題となるのは、実は、以上のような注文が無理だという面ばかりではない。問題はむしろ、言語地図集とは各図対比すべきものだということ（これは同感である）を根拠として、以上の

ような一種の区画論的観点のみを提出するところにある。配符法の基準を言うなら、別に、標準語形を○系統の符号で統一せよとか、近畿地方から北陸または四国に発展したと見られる語形を□系の符号にせよとか、上代文献に現われるものを青色にせよとか、その他いろいろな提案がありうるではないか。

言語地図（集）は、単に区画論のためにのみあるものではない。区画論的立場から利用することも一つの道であるが、作図者は、その目的のためにのみ精力を傾けることはできない。別の観点があるなら、それもいいではないか。全部を生かして地図を作るがよいと言われても、これはとても実現できない。

評者は、一方では言語資料間の差異を、符号の差異と対応させることも提案している。「事象上のへだたりは+3だのに、代表符号上のへだたりは+2でしかないというようなことのないようにしたい」「K-とS-との距離と、赤色と桃色との距離とは、よく吻合するか」などとある。評者の意図が事実上可能かどうかは別として（多分不可能であろう）、これとさきに示した「配符の地方的基準」というものと、はたして両立させることができるのであろうか。

日本言語地図を評して「図ごとに任意に（というと、恣意的となる）、興味本位などから、符号のあれこれを用いるのは、学問上、建設的とは言えない」などと言われると、現実に地図を作成しているわれわれは、比喩は悪いかもしれないが、野党にあれこれ追求される政府与党の気持ちも、だんだんわかってくるような気がする。われわれとても、できるかぎり各図を対比できるよう、符号を工夫している。

評者は、符号を色わけによって示すことに、本来好意を持たないらしい。「白・黒に終始して、それで、言語地図の、品格ある鮮明さをねらう」とか「言語地図に色を用いるのは、じっさい容易ではないしごとと言える。ただに興味本位でつかう場合は別である」とかいうことばが見える。

われわれは、複雑な方言の分布現象を、可能なかぎりいろいろな手法を使って表現しわけようとする。符号の形の違い（基本形の違い・補助要素の違い）・大きさの違い・方向の違いなどをほどよく使いわけようとする。この際、さらに色の違いという新しい次元を挿入すれば、符号間の弁別はいっそう多様になり、鮮明になるではないか。人間の持つ各種の感覚を、可能なかぎり動員してみようとすることこそ「言語地図集の理想を目ざす」ことになるのではないか、とわれわれは考える。経済的理由その他で色を使うかどうか考える場合は、別である。また、色を使わないでもはっきりした地図の書ける場合のあることも事実である。しかしこれらは、「理想を目ざす」す一般原則を考える際参考にならない。

言うまでもないが、われわれは、興味本位や表面的な美しさを求めて符号を使いわけているわけではない。〃きれいな地図だ〃とか〃すこしごたごたしている〃とか口にすることはあっても、学問的な立場をゆるがせにしているわけではない。いったい、言語地図が〃すっきり〃したり〃混乱〃したりして見えるのは、もともと、材料としての方言現象に由来する場合が多いのではあるまいか。

おわりに

評者は言う。原資料がまず大切である。次に資料の分類が肝心な作業となる。地図は原資料に忠実でなければならぬ。一方見やすい

ものでありたい。言語地図集は、各図が相互に対照できるものであることが望ましい。そのためにも符号の選定は重大な意味を持つ……。こうした原則的な発言については、いちいちその通りだと思う。われわれも、つねづねそう考えているからである。それが、いったん具体的な問題にはいると、評者とわれわれの考えの間に、くい違いがいくつか目立ってくるのは、なぜであろうか。なぜであるかの判定はもはや第三者にゆだねたいが、最後に、われわれが書評を読んで受けた全般的な感想を記しておこう。

まず「日本言語地図」には、もっともっと批判してしかるべき側面があるはずである、ということである、原資料が大切であるとするなら、調査項目の選び方、質問法、被調査者の選び方、調査地点などに関しても問題があるのではなかろうか。評者の、生活語研究という方言学上の立場からは、この地図集はどう評価されるのであろうか。われわれは、地図を作ることにも苦心しているが、平行して、別冊「各図の説明」を書くについても苦心している。地図作成上の技法的側面以外に、この「各図の説明」についても、あわせて御意見が伺いたかった。もっとも、これらは、第1集（全体の六分の一）のみが公刊された時期に、すべてを期待することは理不尽なことかもしれない。

むしろわれわれは、書評(八)の末尾の「研究所の図を材料にして、体系・組織・統一を目ざしての新図を作ることも、今は可能である」ということばに、別の意味の期待をかけるべきなのであろう。

われわれは、単に紙の山を世に出したつもりはない。われわれは、また、いちおうの姿を整えた形で資料を公表したけれども、あれが全面的・最終的整理の結果とは思っていない。「日本言語地図」は、さらに深い立場からの堀り下げを待っているとも言えよう。別冊「各図の説明」まえがきにも、各分布地図をいっそう深く理解するためには、原資料にもどって分析する必要もあろう、徹底的な言語地理学的解釈はいまだしである、読者も独自の立場から研究を進められるよう期待するむねが記されている。

この地図（集）が、いろいろな研究者によって、さまざまな角度から分析され利用されることを、われわれは心から期待している。実は、そういう気運が学界にみなぎった時にこそ、はじめて〈言語地理学〉という学問が、本当の意味でこの日本に根をはった、と言えるのかもしれない。

—国立国語研究所員—